

## 嵇康論(二)——「答二郭詩」に見る自立の契機

大上正美

### 一

その存在の全てで語らなければ何も語ったことにならない類の文学者がいる。苛酷な時代に対して自己存在の全てでもって辛うじて対峙した文学者の場合だ。ここにいる存在の全てで語るとは、圧倒的な政治権力の前で現実の生の危機にさらされながら、思想・文学の営為の全てを包括した「表現」次元へと自己を押し上げていった、そのすがたを運動域として掬いとることである。自己を「表現」へと押し上げていく、そのさまを表現(作品)に即して見ないでは何も見ないに等しい。そのような本質的に表現者以外の何者でもない存在は、生の危機にさらされ続けた魏晋南北朝期にあってもそれほど多くないが、阮籍や嵇康は確かにそういう文学者であった。阮籍・嵇康と、竹林の七賢と称された他の存在との逕庭も、まさにその「表現」次元の問題にこそある。従って阮籍や嵇康への接近の方法は、も

ちろん単なる作品論の総和であるはずもなく、また作品から事実次元へと立ち返る評伝に終らせるものであってならないのは言うまでもない。前稿<sup>注①</sup>からはじめた筆者の問いと方法も、嵇康の表現者としての根源性を考えるためであった。もっとも嵇康の存在の全てで語ろうとすることは、そこにおいて論者もまたその存在の全てで語ること強いられるというところに他ならない。最近の嵇康論のいくつかが視点と方法、そしてその文体とにとりわけ刺激的であるのも、各論者の苦渋の営みであるからに違いない。嵇康という存在がそれを強いるということでもある。以上が自戒を含めた前置きである。

### 二

嵇康の詩は現在総数六〇首程が残されている。モチーフ別に見ると、いわゆる「贈兄秀才入軍詩十九首」や「與阮德如詩」「答二郭詩三首」などの贈答詩と、「述志詩二首」

や「幽憤詩」などの言志詩とが軸になっている。贈答詩は離別をめぐって相手とやりとりしたときの、言志詩は自己と直接向き合ったときの作品である。前稿での用語で言えば、前者は対他性を、後者は対自性を前提にした表現の場である。

前稿で筆者は、対他性を前提とする二首の絶交書における表現の位相を対照させることによって、対自性へと向かうことばと、対他性に徹底することばの様相を見た。梁の江淹が「雜體詩」三十首の中で嵇康の詩を模擬するに際し、「言志」の詩題をもつてしたことからも明らかのように、嵇康詩の本領は言志詩にこそある、ということとは否定できない。しかし贈答詩もまた、嵇康にとっては本質的な表現の場であった、と筆者は考えている。前稿からの関連の上で、本稿ではまず是对他性を前提とする贈答詩をとりあげ、そこにおいて厳しく自己に向かわざるを得ない嵇康のことばのあらわれを確認しておきたいと思う。

「答一郭詩三首」其三全20句の末尾は、次のようにしめくくられている。

15 功名何足殉 功名 何ぞ殉むるに足らんや  
乃欲列簡書 乃と簡書に列せられんことを欲すとは  
17 所好亮若茲 好む所 亮に茲くの如くんば

楊氏歎交衢 楊氏のごとく交衢に歎くことあらん  
19 去去從所志 去かん去かん 志す所に従はんぞ

敢謝道不俱 敢て謝ぐ（なんぢと）道 俱にせず

二郭のうち、ここでは郭遐周に向けての発言と思われるが、嵇康はいう、「功名など僕は求めはしない。だのになんと君は僕に、青史に名前をつらねるような生き方をして欲しいと言われるなんて」。君の好むところが本当にこのような生き方にあるのなら、君自身楊朱のように人生の岐路に立たされ、窮する事態に立ち至ることになるだろう。旅立とう、僕は僕の志すところに従って旅立とう。敢えて君に別れのことばとして言っておきたいと思う、君とは道を同じくしない、と。

強い調子で別れが告げられており、まるで絶交を宣言しているかのようである。別段絶交しなければならぬ対立関係にあったという事実はなく、むしろ友情を確かめるには恰好の別離の場面であったはずである。それがなぜにこのような物言いになるのだろうか。そのことの意味を問うことから始めよう。

### 三

二首の絶交書の場合、絶交相手の側からの返書が残され

ていない。そこにあっては、山喬や呂襲の内的関わりの様相と情理を指定して嵇康の思想を重層的に再検討する、といった手段がないと言える。それに対し贈答詩の場合、嵇喜や阮侃、二郭らの詩も残されており、贈答対象からの働きかけ、あるいは応接のすがたを内的に探ることができ。従って、両者の関係の場にたちかえり、嵇康の詩におけることばの立ちあらわれを問題にすることができ。嵇康の發言からは、文字通りの意味を示すに終わらない、双方のやりとりの中での真の意味と表情とが見えてくるはずだからである。

甘露三年（二五八）頃<sup>注②</sup>、嵇康が山陽の寓居を去って河東の地へと避難するに際し、郭遐周・郭遐叔兄弟との間に詩のやりとりがあった。郭遐周からの贈詩が五言詩三首、郭遐叔からの贈詩が四言詩四首、五言詩一首、嵇康の答詩が五言詩三首残されている。前節にその末尾を見た嵇康の「答詩其三」が多分に意識した郭遐周の「贈詩其三」は次のようである。

### 贈嵇康詩三首其三

郭遐周

1 離別自古有 離別は古より有り

人非比目魚 人は比目魚に非ず

3 君子不懷土 君子は土を懷はず

豈更得安居 豈に更に居に安んずるを得んや

5 四海皆兄弟 四海 皆 兄弟たり

何患無彼姝 何ぞ彼の姝<sup>うは</sup>の妹しき（友）無きを患へんや

7 巖穴隱傳說 巖穴 傳說を隱し

空谷納白駒 空谷 「白駒」（の賢人）を納る

9 方各以類聚 方は各おの類を以て聚まり

物亦以羣殊 物は亦 羣を以て（他と）殊<sup>こと</sup>なる

11 所在有智賢 在所 智賢有り

何憂此不如 何ぞ此に如かざるを憂へんや

13 所貴身名存 貴ぶ所 身名の存すること

功烈在簡書 功烈は簡書に在り

15 年時易過歷 年時は過歷し易く

日月忽其除 日月は忽として其れ除<sup>み</sup>く

17 勗哉乎嵇生 勗めよや 嵇生

敬德以慎軀 德を敬しみて以て軀を慎しめ

嵇康詩の第三首15・16句「功名何足殉、乃欲列簡書」の

發言は、右の13・14句「所貴身名存、功烈在簡書」を受<sup>ま</sup>け、それに激しく反撥していたのだということが分かる。

もともと「功名何足殉」のことばだけをとりあげれば、別に注目するほどのことはない。同じ詩の8句目にも「名位も居る可からず」と言っている。また例えば「名位を以

て贅瘤と爲し、資財を塵垢と爲す」(「答向子期難養生論」)との考えは「養生」論争をはじめとして頻発される。功名を求め、青史に名をつらねる生き方を拒否することは、日頃の嵇康の立場と生き方を一般的に述べたものにすぎないとも言える。しかしながら郭遐周の贈詩に対する答詩での言述であることを思えば、発言の趣意は重く深い。嵇康には、郭遐周が「貴ぶ所は身名の存すること」と発言していることが許せないのである。嵇康は「身名」を「功名」と言いかえて拒絶する。つまり嵇康にあっては、今の時代、「身」と「名」とが同じ次元で語られることががまんのならないことであつた、ということだ。何ヶ所かで嵇康は言明している。

欲與生不竝立 欲と生と並び立たず

名與身不俱存 名と身と俱には存せず

(「答向子期難養生論」)

名與身孰親 名と身とは孰れか親しき

哀哉世俗殉榮 哀しいかな 世俗 榮を殉む

(「六言詩十首」其四)

身貴名賤 身は貴く 名は賤し

榮辱何在 榮辱 何くにか在る

貴得肆志 (自) 得を貴び 志を肆にし

縱心無悔 心を縦にして悔ひ無し

(「贈兄秀才入軍詩十九首」其十八)

榮名穢人身 榮名は人身を穢し

高位多灾患 高位 灾患多し

(「與阮德如詩」)

「欲」「世俗」「榮」「高位」の側に属する「名」と、「生」

「志」「心」の側に属する「身」とを厳然と区別しておかなくては、現実からめとられてしまふ、と嵇康は認識していた。例えば、右の用例のうち「名と身と俱には存せず」について、高田淳氏は向秀との一連の養生をめぐる論争をとらえ、それが「この世の現實であり矛盾なのである。この矛盾の解決は、名と欲の虚妄さを身と生とによって明らかにすることによって求められる。……向秀は常識的な妥協論者である。嵇康のいう生と欲・身と名との矛盾は、彼においては樂天的に結合されている。」と指摘されている。向秀への再反論の根拠は、そっくりそのまま郭遐周とのやりとりにも重ねることができるとは違いない。この世の現實と矛盾の相に無意識でありすぎた郭遐周への反撥のことばであつたのである。

ところで、郭遐周の贈詩の真意はどこにあつたのか。第一首第二首と、第三首とでは大分趣を異にする。第一首

は、自身の時俗からの避逃と、そこでの嵇康との交遊を想起し、突然の別れを悲しむ。これまでの嵇康との交友関係の経過をふりかえっているのである。第二首は、このたびの別れが「永離」になるのではないかと恐れ、ともに自由に遊べないことを嘆く。とりわけ「歎ず 我と嵇生と、忽然として將に永へに離れんことを」に収斂されていく痛切さを見のがすことはできない。そのことを確認しておいた上で第三首を読めば、別れの悲しみを断ち切らんとした次元から歌い起こされているのがよく分かる。「離別 古より有り」と個別次元から別れを普遍化させて詩ははじまる。自己の溢れる感傷を処理しておいてから、嵇康に向かうことがたぐられていく。旅立つ嵇康の身を案じ、決して孤立した存在にならぬ、と執拗に励ましているのだ。どこに行こうと友人はできる、苦しいときもしばらくの間だ、時を待て、類をもって聚まるものだから賢人は孤立しない——と、勇気づけのことばを次々に重ね、嵇康の孤立を真に氣遣う友情が厚みをもって届けられる。末尾の「<sup>注⑤</sup> 勗めよや嵇生、徳を敬しみて以て身を慎しめ」には、常套表現の背後から嵇康の生を願う心情が切々と響いてくる。そういう文脈の中で、郭遐周は「身名」こそ大切に、と言ってしまったのである。委細を尽くすあまりのことばであっ

た、と解さなくてはならない。

嵇康の答詩の第一首と第二首にあっては、これまでの同志郭遐周との別れを悲しみ、自己の信念を語るだけで、郭遐周と直接ぶつかることはなかった。第一首では全編友人の真情を思い、「<sup>注⑥</sup> 三子 嘉詩を贈る、韻として幽蘭の馨りあるが如し」と感謝する。必ずしも美的辞令ではないのは、別れのつらさをしぼり出すような歌い方で一貫しているからである。「土を戀ひて親しき所を思へば、能く憤盈せざらんや」と激して結ぶ。第二首では、自身の育ちを想いおこすことからはじめられ、時代を生きる難しさを語りつつ、神仙の遊を求める信念を語る。

しかし第三首にあっては、郭遐周の友情溢れる送別のことば全体を、あえて無視したとしか思えない。情の次元でとらえることをしないで、ことばとして、「身」と「名」と截然と区別できないその不備を突いたのである。それは他でもない、後述するように、ことばの背後にある郭遐周の現実認識の甘さを突いたのである。

嵇康の五言詩を評し、梁の鍾嶸は「<sup>いささ</sup> 頗か魏の文（帝）に似る。過ぎて峻切を爲し、訐直にして才を露はし、淵雅の致きを傷ふ」（『詩品』中品）といった。ここにいう「訐直」は、『論語』陽貨篇に見える子貢のことば「訐きて以

て直と爲す者を惡む」から出る。語の本来的な意味で、この五言詩には「訐直」の評語が当てはまるであろう。郭遐周の友情でくるみこまれた認識に潜む甘さに黙っていられないで、それを発き立てる嵇康の過度の「峻切」さが見られるのである。

ここには鍾会への蔑視のエピソードをはじめとして、いかにも嵇康らしい訐直で峻切な心性がうかがえよう。しかし、ことは言うまでもなく嵇康の心性に帰せられる問題に終わらない。ここにおいて示した「訐直」の姿勢こそ、現実の情況のただ中で自己の思想と倫理とが厳しく問われているのだ、とする自覚の上に立つことであった。しかしこのことを詳述する前に、明確にさせておかなければならぬ問題がある。二郭との別れの場合と、兄嵇喜との別れの場合とでは、嵇康にとっての別れる対象の存在意味や別れの情況の違いが大きかった、という点に関してである。

#### 四

嵇康の贈答詩のなかで「贈秀才入軍詩十九首」の存在は欠かせないが、しかし詩題、詩数、制作時期、嵇喜以外の兄の存在、嵇喜の入軍や秀才となった時期、五言詩一首の判断、等々基本的な点で多くの問題が残る。松本幸男氏に

よれば、兄嵇喜が出仕するに際し、嵇康から贈った詩は「贈秀才入軍五首」(『文選』卷二十四所收)と、「乘風高逝」以下の「四言詩三首」とであり、とくに後者は嵇喜の「答詩四首」と対応するらしい。<sup>注⑤</sup>便宜上今は松本説の限定に沿って筆者の考えをすすめることにする。

両者の詩を比較すれば、嵇康からの贈詩の大意は、「贈秀才入軍五首」にあつては兄との別れを惜しみ、「四言詩三首」にあつては遊仙の楽しみを歌うのに対し、兄からの答詩は出仕する理由を綿々と述べる。嵇康の詩には兄の行く末を案じる情が基底にあり、一方の嵇喜の詩には進退を異にする道を決断した処世観が展開されるが、終始弁明口調で語られていると言える。

このような両者の間に交わされる出処進退をめぐるやりとりは終始かみ合うすがないのも致し方ない。それぞれがあるべき存在として提出する「至人」を例にとってみるだけでも十分に分かる。嵇康は第三首で、

1 流俗難廨 流俗にあつては瘡め難く

逐物不還 物を逐ひて還らず

3 至人遠鑒 (されど) 至人は遠く鑒て

歸之自然 之を自然に歸す

と、世俗のなかで外物を追いまわすばかりの存在に対す

る、自然を体得した「至人」をいうのに対し、嵇喜は第二首の末尾で、

9 縦軀任世度 軀を縦にして世度に任す

至人不私己 至人は私己せず

私一身を離れ、世俗のやり方に身をまかす、と答えている。また、第二首で

1 君子體通變 君子は通變を體し

否泰非常理 否泰 常理に非ず

といい、第三首で

1 達人與物化 達人は物化と與にし

無俗不可安 俗として安んずる可からざる無し

という。ともに冒頭から、まるで嵇康の用語とは概念の違う「君子」「達人」の見解が示されている。世俗に頑として背を向ける嵇康と、世俗に心を傾ける嵇喜とは、そのはじめからそっぽを向き合ってしまったのである。

右の「縦軀任世度」とか「無俗不可安」とかの言説は、嵇康の「縦心無悔」(其三)とか「世俗紛紜、棄之八戎」(其三)とかを意識してなされている。すべては「世俗」を拒否するか、容認するかの一点にかかっている。その世俗認識の先に、避世を徹底する方向に向き続けるか、仕官の方向に向きを変えるかが分かれるのである。

敢然と存在する世俗(時世)認識の差を抜きにして、出処進退を第一に言い出せば、所与の現実を絶対視するに過ぎないことになる、と嵇康が考えていたのは言うまでもない。嵇喜が「君子は通變を體す」「時至りて忽ち蟬蛻す、變化には常端無し」(其一)「出處は時資に因る」(其三)と「變」をいい、「時」を強調すればするほど、嵇康には自己弁明の響きしかもたない兄の声であつたらう。「時至りて忽ち蟬蛻す」と使用する「蟬蛻」の語なども、方向が逆を向いてしまっているのだ。嵇康には「蟬蛻して穢累を棄つ」(「遊仙詩」)としてしか使用できないのであるから。

嵇康が兄との別れにわざわざ詩を贈ったのは、そこでの議論を期待してのことではないであろう。嵇喜という存在は他者としての相貌をもって映ったのでなく、肉親であつたからに違いない。同時にまた、兄と共に過ごした避世の「逍遙」の時間を確認しておきたかったのもあろう。対する嵇喜にあつては、これから出仕せんとすることが第一の関心であり、別れの悲しみはそれほど深刻ではなかった。嵇康詩に比べ、嵇喜の答詩には別離の情が表明されていない。またその出仕も、止むに止まれぬ思いの末の、強いられる苦しい選択という面もない。「李叟は周朝に寄り、莊生は漆園に遊ぶ」(其一)とか「都邑も優遊す可し、

何ぞ必ずしも山原に棲まんや」(其三)などは一種の朝隱のような消極的処世の表明であるが、しかしそれに続けてすぐ「孔父は良駟に策うち、世路の艱きを云はず」と積極的処世をも厭わない発言をしている鈍感さから見ても、ここでは仕官に際しある程度の意欲をもって臨んだと考えるべきである。そう考えるなら、よりよいと判断した道を自ら選択していったのであり、弟と共有した時間と空間への未練はあるはずもなく、答詩の中で現実参画への意味づけを自己に試みたということである。そういう意味では、自覚の有無はともかく、嵇喜にとって嵇康という存在は自己の行為の批判者としての、言い換えれば他者としての相貌を有していた。自己武装に終始し、別れを悲しむ感傷を滲ませることなく、弟のその後を思いやる面もないのもそのためである。決して嵇康に届きようもない自己弁明を積み重ねなければならなかったのも、その生が嵇康という存在によって否定的なものにさらされていた、という構図故のことであつたとも言える。<sup>注⑩</sup>

同じく嵇喜は第三首の末尾で、

保心守道居 心を保ち道を守りて居れども  
親變安能遷 變を親れば安んずるも能く遷る

という。戴明揚注に『禮記』曲禮上の「安きに安んじて而

も能く遷る」を引く。松本幸男氏は鄭注の「己、今此の安きに安んずるも、後に害有るを圖れば、則ち當に能く遷るべきを謂ふ」を参考にされる。<sup>注⑪</sup>してみれば、仕官は「後に害有るを圖」った賢明な決断だということになり、嵇康の「後に害有るを圖」って避世の意志を固める方向とは全く逆向きである。安きに安んずる空間の危うさから、無反省に社会的現実へと向かうところに論理のすりかえが露呈する。「變」とか「遷」とかの方向が問題にされないのだ。

嵇喜の答詩第一首の「華堂臨浚沼」以下、「逍遙步蘭渚」までの冒頭五句はのびのびと遊ぶ空間を歌うが、そのとき「物に感じて古人を懷ふ」と続けて老子や莊子の小役人としての仕官をつなげていく。つまり、のびやかな「逍遙」空間と仕官とが地続きであつたことを明かしているのである。自己の贈詩に答えて兄からこのようなことを返された嵇康は、しかしながら「時至」として時代を容認する者は真の他者ではないのだから、言い換えれば自己の思想を強固にする契機となる存在ではありえないのだから、応接の仕様がなない。嵇喜に対して対立の契機を求めようにも媒介するものがなかったというのである。嵇康にとって嵇喜は「兄」以上ではなかった。<sup>注⑫</sup>それは裏を返せば、他者として存在しなすすむほど、そのとき嵇康の避世空間に危



機はさし迫っていなかった、ということでもある。

## 五

### 答二郭詩三首 其三<sup>注⑨</sup>

1 詳觀凌世務 詳らかに世務を凌ぐを觀るに

屯險多憂虞 屯險にして憂虞多し

3 施報更相市 施報 更<sup>こも</sup>も相市め

大道匿不舒 大道は匿れて舒<sup>のほ</sup>びず

5 夷路殖枳棘 夷<sup>なだ</sup>かなる路にも枳棘<sup>しき</sup>殖り

安歩將焉如 安歩せんとするも將<sup>は</sup>た焉<sup>ゆ</sup>くに如かん

7 權智相傾奪 權智 相傾奪し

名位不可居 名位も居る可からず

9 鸞鳳避尉羅 鸞鳳は尉羅を避け

遠託崑崙墟 遠く崑崙の墟に託す

11 莊周悼靈龜 莊周は靈龜を悼み

越搜嗟王興 越の搜は王興を嗟く

13 至人存諸己 至人は諸を己に存し

隱璞樂玄虛 璞を隱して玄虛を樂しむ

15 功名何足殉 功名 何ぞ殉むるに足らん

乃欲列簡書 乃<sup>なほ</sup>と簡書に列せられんことを欲すとは

17 所好亮若玆 好む所 亮に玆<sup>こゝ</sup>くの若くんば

楊氏歎交衢 楊氏のごとく交衢に歎くことあらん

19 去去從所志 去かん去かん 志す所に從はんぞ

敢謝道不俱 敢<sup>つ</sup>へて謝ぐ 道 俱にせず

構成は1～8句で權謀<sup>けんばく</sup>うずまく世の中を生きなければならぬ險難さをいい、9～14句でいかなる仕官の誘いにも応じず、避世の志が揺がないことを再度表明する。そして

最後に15～20句で、二郭に向けて激しく訣別のことをば投げつけたのである。

このときの河東の地への避難について『魏氏春秋』（『三國志・魏書』王粲傳注引）には、

大將軍嘗て嵇康を辟<sup>め</sup>さんと欲するに、康は既に絶世の言有り。又從子善からず、之を河東に避く。或いは世を避くと云ふ。

と二つの理由があげられている。ちなみに、後に河東から歸るや、またぞろ仕官問題が持ち上がりそうになり、「與山巨源絕交書」を書くことになったのである。

ところで第一首に「豫子は梁の側に匿れ、聶政は其の形を變ず」と不気味な詩句が見え、その後「…慮ひは苟くも自ら寧<sup>やすん</sup>ずるに在り、今當に他域に寄すべし…」と続き、從子との間がこじれた事態の切迫さを伝えている。また第三首の中ごろは日頃の感懷を述べたとも言えるが、『魏氏春

秋』という司馬昭が嵇康を辟そうとしたことを11・12句の故事に暗示していると言えまいよう。

このとき嵇康は身の危険と処世の根幹を問われる危うさのただ中にいたのである。急迫した状況であった。思いもよらぬ急な旅立ちであったことは、郭遐叔の四言詩四首が、事態の急変に驚くばかりの見送る友人の動顛ぶりをよく伝えている。いずれも詩の中途の「如何ぞ忽爾として」という転調がまことに効果的であり、情況に強いられた避世であることがよく分かる。

一方の郭遐周に山陽の地を避ける理由はなかった。彼の贈詩には激しい時代蔑視や險難な生は語られてはいない。逃げるように旅立つ嵇康のその後の孤立を案じるが、自身をも揺がすとする危機意識は切実でなかった。友人の立場に立って慰める、情況に関しては一種の余裕の中にあればこそ、河東の地にあっても「四海皆兄弟たり」であり、「方は各おの類を以て聚まり、物は亦羣を以て殊なる」と樂觀的であった。少なくとも嵇康にはそう映ったに違いない。「縁有れば復た東に（歸り）來たれ」（其二）と呼びかけているのも、時をしのげば再び今までの交遊の時間が、ここ山陽の地にあって成立すると思っている。嵇康が「友を結びて靈岳に集まり、彈琴して登りて清歌せん、能く我

に従ふ者有らば、古人何ぞ多とするに足らん」（其二）と同行を呼びかけるのに対し、「欽しめや其の所を得よ、我が心をして違へしむ」（其二）と従うことができないのが残念だと表明する。これらのやりとりが伏線となつて、嵇康は第三首で「敢て謝ぐ道 俱にせず」と訣別するのである。

従つて現実的危機に瀕している友人に対し、郭遐周は友人の生を危惧する情の次元では届きえなかったけれど、自己の倫理思想の次元では届きえなかったのである。嵇康にとってことは根源的な生の基盤を問われる問題であつた。「身名」について嵇康がぶつからざるを得なかつたのは、志を同じくするはずの郭遐周の樂天的認識そのものであつたのだ。

時代の暗い影は山東の交遊空間にまで押しよせてきた。そのとき、時代と截然と分かつ避世空間が現実存在するかどうか。よることができるのは避世の方向を徹底させる精神だけである。そしてその精神を媒介させるものは、強烈な反時代意識以外にあり得ない。ここで嵇康の第三首の構成を再度想起しなければならぬ。冒頭から時代への嫌惡を意識に上らせたその後に、避世を再確認して歌っていた。反時代を貫く認識を契機にしてはじめて、その先の避世を語ることができるのである。万物は類をもつて聚まる

という認識も、嵇康をいらだたせたに違いない。圧倒的な権力に侵害されるばかりのいまや、どこにも存在し得ないかも知れない避世の共有空間を、しかし先験的に想定できるといふことは、それはもはや単なる憧れでしかない。後はぶざまに時代に組みこまれていくのを待つだけなのである。脆弱した精神の危うさを、郭遐周の「身名」発言に敏感に嗅ぎとってしまうのである。

前節で見た嵇喜の場合と対照させてみるとよい。嵇喜は時代に向けて自らとびこんでいった。それを惜しむ嵇康は、しかし危機のただ中にいた訳でなく、兄との共有空間はそれはそれでそのまま自己の避世空間として保償され続けていた。時代の罫は巧みに嵇喜を出仕させる程度であって、まだ山陽にまで深く及んでいなかった。だからこそ、兄との別れを悲しむ情の中におられた。しかし今度ばかりは、二郭が自分に示すような情意の中に安住している訳にはいかない。嵇康は郭遐周の発言を否定的媒介として、自己意識を顕在化させたのである。俱には生きずと孤立をも辞さずに強烈に自己意識を顕在化させることによって、もう一度自己と時代との関係の場に自己を立たせ、時代へ向けて拒絶の意志を示そうとしたのである。

## 六

興膳宏氏は、嵇康の哲学的論文に一貫する特色として、第一に「論争的」であること、第二に「生きる主体としての自己を置き去りにして放たれた空論ではない」ことを指摘されている。この「論」の特色はそのまま「答二郭詩」其三にも当てはめることができるだろう。二郭が真の他者として嵇康の中に存在したからこそ、嵇康はボレミックにならざるを得なかった。そして他者を否定的媒介にしてはじめて、あるべき自己を立たせたのである。刃は全て自己に向けられている訳なのだ。ここでいうあるべき自己とは、孤立をも辞さず、「志す所に従ふ」精神である。嵇康の作品の基底からはいつも、自己の志のままに生きよという声が響いてくる。

ここで想いおこすのは、「與山巨源絶交書」の最後に示された「(君が)區區の意有り」と雖も、亦た已に疏なり」の発言である。山濤の嵇康を気遣う気持ちを身にしてみうけとめながら、しかし善意や誠実さの次元を超えた生き方の根源にかかわる問題だとして、絶交書をたたきつけた。それと同じくここにあっても、嵇康は郭遐周の「區區の意」を十分にうけとめながら、やはり「身名」の語にぶつ

かり、「已に疏なり」と向かい合ってしまうのである。それは、本来なら同志であり続けることを確認してもしかるべき場面でありながら、道を異にするとして友人の向こうに独り自己を立たせることであった。

山濤は「嵇叔夜の人と爲りや、巖巖として孤松の獨立するが若し」(『世說新語』容止)と評したといわれる。嵇康自身も「山上の松」を望んで「獨立して迥かに雙び無し」(『遊仙詩』)と心を寄せている。獨立する孤松のイメージは、いかにも嵇康にふさわしい。また劉宋の顔延之は「俗に立ちては流議に<sup>きんち</sup>迂ふ」(『五君詠』)と、時代と拮抗する姿を歌っている。

その場合の「俗に獨り立つ」とは、いわば世俗を否定して即自的に立ったのではなく、世俗を否定する精神の内部にもしのびよる危うさを峻拒して自立しているのである。そのような危機意識を先鋭化させながら、たえず自立へと自己をせり出していくことによって、次第に大きく権力にからめとられていく現実の総体に対し、抵抗の質を自らの内部につくっていったのだと思われる。

ところで、「答二郭詩」其三には他者を切る精神の志向が見事に示されていたが、そのときの苦しげな内面は表現されていないと言えはいえる。苦しい内面をももらさず

トータルに自己に関わる詩は、主として言志詩の領域であった。ただ、嵇康にとって贈答詩もまた、本質的な表現の場であったとは言えそうである。それを証するために本稿では、對他性を前提とする「答二郭詩」の中に、嵇康の対自のありようの核となる精神の独自の様式——贈答詩という場と時とを契機として自立する精神を確認しておきたかったのである。

〈注〉

(青山学院大学)

① 「嵇康論」——絶交書二首に見る表現の位相」(『中国文化一九八九』漢文学会会報第四七号)

② 劉汝霖『漢晉學術編年』巻七ほか、諸家はおおむね二五八年頃のこととしている。

③ 清・陳祚明は「此云功烈在簡書、故康答以功名何足殉云云、訓贈詩各見懷抱若此。」(『采菽堂古詩選』巻八)という。また殷翔・郭全芝注『嵇康集注』(一九八六年一月・黃山書社出版)も「此針對二郭詩所貴身名存、功烈在簡書而言、云自己的志向與此不同。」と解する(六七頁)。

④ 「嵇康の『離』の立場」(『大倉山学院紀要』2)

⑤ 陳祚明は「清氣相引、在情必宜。……末句愼軀之語、規戒更切。」という。

⑥ 陳祚明は「結語亦開激。」という。

⑦ 「評直」について、例えば高木正一訳注は、「大胆且つ直截な自己表白をすること」と広い意味でとらえ、四言詩にこそふ

しい評語だとされる(『鍾嶸詩品』二二三頁。一九七八年三月・東海大学出版会)。嵇康詩全体から見れば妥当な見解であるが、ただ「答二郭詩」其三に限り言えば、本来的な意味での「計直」の評語がふさわしい五言詩である。

⑧ 古直、陳延傑は人物評語にふさわしいとする。陳延傑『詩品注』(一九六一年一〇月・人民文学出版社)は「按叔夜拒鍾會、與山濤絕交、皆其評直者。」(三三頁)と注す。また古直『鍾記室詩品箋』(隅樓叢書)には右の二例の他に、「案魏志注引康別傳、孫登謂康曰、君性烈而才備、其能免乎」も引く。

⑨ 「嵇康の贈答詩について(上)」(『學林』第五号) 但し松本氏は陳祚明にならって「贈秀才入軍」五章、「四言詩」三章とされる。

⑩ 戴明揚『嵇康集校注』(一九六二年七月・人民文学出版社)は嵇喜の詩句に注して、『春秋繁露』天道施の「蜩蛭濁穢之中」と、『史記』屈原賈生列傳の「蜩蛭於濁穢、以浮游塵埃之外」とを引くが、いずれも「世俗」を「濁穢」と認識し、そこからの解脱をいう。嵇康の「蜩蛭棄穢累」も本来的意味で使用されている。しかし嵇喜にあつては、時至らぬ仕官前をこそ「濁穢」と嫌惡する心情が基底にあつて、時至りて世俗に向かう姿を「蜩蛭」ととらえているのである。

⑪ その構図は、鍾会の場合とさほど違いはなかったように思う。鍾会にとって嵇康は他者として大きく存在したが、嵇康にとって鍾会は現実の敵ではあつても、固有の他者たり得なかつた。拙稿「鍾会論」(『青山学院大学文学部紀要』第三〇号)参

照。もつとも鍾会は露骨に嵇康を敵として弾劾する。そういう攻撃性は嵇喜にはなかつた。肉親でもあり、また鍾会ほどの大物でもなかつたからだ。しかし阮籍から礼法の士として白眼視されたように、存在の構図としては鍾会と同じ次元で嵇康的生を根底において危うくさせる存在だったのである。

⑫ 『嵇康集校注』二二三頁。松本論文は、注⑨に同じ。

⑬ 終生嵇康にとって嵇喜は兄以上の存在ではなかつた。固有の他者であつたか否かをめぐつては、孫登と対置してみれば明らかだ。嵇康は獄中であつて、孫登から「保身の道 足らず」と言われたことを想い起こし、悔いる。孫登は嵇康にとって固有の他者として立ちあらわれたのである。獄中の嵇康を嵇喜はたずねている(『世說新語』雅量篇注引『文士傳』)が、嵇康は「顔色不變」と心を乱すことはなかつた。つまり、嵇康は獄中であつて、時代と共に歩む兄の姿を見ても、時変を見きわめよといふかつて兄に返されたことばを想い起こしてはいないのだ。「幽憤詩」には悔いが次々とわきおこるが、しかし困難な時代に生を全うできなかったことを悔いているのであり、出仕しなかつたことを決して悔いている訳ではない。刑死に臨み孫登が固有の他者として存在したのに対し、他者としての嵇喜は終生浮かび上がりようがなかつたのである。

⑭ 5句「値」を「殖」に、12句「稷」を「搜」に改めた。『嵇康集校注』六四頁参照。

⑮ 「嵇康—孤独の求道者」(日原利国編『中国思想史(上)』一九八七年七月・ベリかん社)